

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	文人外交官程順則の「旅」の生涯
Author(s)	中村, 春作
Citation	中國中世文學研究 , 75 : 15 - 31
Issue Date	2022-03-28
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052555
Right	
Relation	



文人外交官程順則の「旅」の生涯

中村春作

一 程泰祚と程順則

近世琉球を代表する儒者のひとり程順則（一六六三―一七三四）は、外交官、政治家として活躍し、また優れた詩文を遺した文人として知られる。そして、その「旅を生きた」七十二年の生涯の軌跡は、近世期の清―琉球―江戸をつなぐ文化交流、伝達における貢献で際立っている¹⁾。

晩年の役職名のちなみで名護親方と呼ばれ、名護聖人とも敬称される程順則は、久米村程氏の七世として生まれた。父は程泰祚。母は鐘氏、真饒古樽。父程泰祚はもともと、福建からの移住民、いわゆる久米村「閩人三十六姓」の一族ではなく、王府首里の京阿波根親雲上実基の五世の孫、外間筑登之実房の次男として生まれたが、その才を見込まれて久米村の程氏を継ぎ、外交官「通事」として活躍した人物である。また、孔子廟創建事業にも関わった経歴をもつ。

程泰祚は、一六六三年（尚質一六、康熙二）、「謝恩存留通事」として清国に派遣され、福州琉球館に三年間滞

在、その後、一六七三年（尚貞五、康熙一二）に「進貢都通事」として再度福州に赴くが、閩江河口にある著名な岩礁群「五虎門」にさしかかった際、海賊の襲撃に遭い、激戦のなかで重傷を負ってしまふ。当時、琉球は二年に一度、清朝の北京に朝貢使節を送っていたが、それは文字どおり命がけの旅でもあった。海流や天候の急変、台風による遭難のみならず、海賊の来襲もあったからである。

『程氏家譜』²⁾には、同年三月三日に那覇を「開船」して「十八日黎明、閩の界外に到り塘地に竿するに、方に賊船十三隻に突遇す。辰時より戦ひ申刻に至る時、泰祚重傷を被り閩に進みて療治す」其の時、北京大文張承宣、湧田親雲上宗恒、並びに水梢四名戦死す（「梢」は舵取り）、「……」と記されている。また琉球王国の外交文書の集成『歴代宝案』には、「賊に砲を用ひて打死せらるる随伴四人、傷つけらるるもの二十余人にして、本船、正に危急に在り」等々、この時の様子が生々しく記録されている³⁾。この後、救援に駆けつけた中国艦船の助けを得て、程泰祚はなんとか福州に上陸して傷を癒やした後、

翌年一月北京に入貢して、無事役目を果たしたものの、今度はその帰途、清朝に謀叛した「三藩の乱」に遭遇し、閩を本拠とする靖南王耿精忠の難を避けて、蘇州に在留したまま不幸にして病を得、一六七五年九月、四十二歳をもって蘇州府胥門外天妃宮において客死を遂げている。この父泰祚の難死と程順則一家の悲運についてはまた後に触れることとし、ひとまずは、子順則の生涯を概観しておくこととしよう。

程順則は一六六三年（尚質一六）の生まれ、童名は思武太、字は龍文、号は念菴。十二歳で「若秀才」、十四歳で「秀才」に挙げられ元服し、十五歳で家統を継いで「真和志間切古波蔵地頭職」となる（「間切」は琉球時代の区画のこと）。一六八三年には「通事」に陞り、「勤學の事の為」謝恩紫金大夫王明佐圀場親方に随い渡唐し、福州に四年間滞在して陳元輔、竺天植に学んだ経歴を持つ（「勤學」とは私費留學生のこと）。彼はこの一回目の渡唐以降、生涯に計五度中国に赴いている。また一七一四―一七二五年（尚敬二―三、正徳四―五）には、慶賀正使尚監與那城王子朝直、謝恩使尚永泰金武王子朝祐に随い、国王の文書に与る「掌翰史」となり、薩摩、大坂、京都、中山道經由で琉球と江戸との間の往還、いわゆる「江戸立ち（江戸上り）」にも加わっている。

こうした度重なる公務出張の合間、順則は「講師師」「漢字筆者」として国家の文教政策に携わり、一七〇四年には「王世子尚純公、王世孫尚益公の召を蒙り、毎夜

四書を侍講し、夕に唐詩を講じ、一七一〇年には「命を奉じて春秋、貞觀政要を講じ」ている（『家譜』）。また、一七一九年（尚敬七、康熙五八）中国からやってきた冊封使（正使海宝、副使徐葆光）の一行、総勢六四九人の接待、対応に当たり、江戸にも流通した冊封記録『中山伝信録』で著名な徐葆光との交流を深めるなど、多方面で活躍した。

一七一五年には紫金大夫に昇任して久米村総役「總理唐榮司」に任ぜられ、晩年の六十六歳には「名護間切總地頭職」を拝命した。没したのは一七三四年（尚敬王二二）一二月、享年七十二。彼はその生涯のうち足かけ十五年間を公務で外地に過ごしたことになる。まさしく「旅を生きた琉球人」を象徴する人物であったといえよう。琉球（沖繩）では、中国への旅を「唐旅」、日本への旅を「大和旅」と呼んだ。程順則の人生はこの二つの「旅」に関わって展開した。彼は、琉球王国がその存立上関わらざるを得なかった二つの大国のはざまを、「旅」して生きたのである。

程順則は公務上の事績のみならず、そうした公務の「旅」を通じて、また「旅」のあいまに、文化史上、思想上の大きな足跡を残している。福州在住の士人と深く交流し、琉球に学問所「明倫堂」創設を献策して実現し、琉球儒学史を初めて著し、『六諭衍義』を江戸期日本にもたらし、新井白石に面談してその琉球研究に貢献した人物が、程順則であった。彼が清―琉球―江戸をつな

ぐ文化交流の歴史に残した功績は大きいのである。
以下、彼が「旅」したいくつかの場面をたどりつつ、
生涯の軌跡とその文化史上の意義を明らかにしていきたい。

二 詩人として、文化の伝達者として

程順則三度目の渡唐は一六九六年（尚貞二八、康熙三五）、「進貢大通事」に任ぜられ、耳目官（進貢正使）毛天相池城親雲上安倚、正義大夫（進貢副使）鄭弘良大嶺親雲上に随って福州から北京を往復した二年間の旅であった。この時順則はその公務の道すがら各地で詩を詠み、寄留地福州に戻ってから、漢詩集『雪堂燕遊艸』にまとめ、そこで板行している（一六九八年）^[4]。
後に冊封副使として来琉した徐葆光が程順則に贈った詩が残っている^[5]。

陪臣朔望至館起居、贈紫金大夫程順則

海外初逢有故情 當年職貢日邊行

舊遊曾賦皇居壯 朝士猶傳白雪聲

異域相親惟使日 重溟難隔是詩名

紫巾鶴髮來迎客 衆裏知君心已傾

海外に初めて逢ふに故情有り 當年の職貢日邊に行はる

舊遊曾て賦す皇居の壮 朝士猶ほ傳ふ白雪の聲

と、程順則が清朝の都、北京（燕京）の宮殿を詠じたことに触れているが（程順則には「都門九日」等、北京の宮殿を詠じた詩が残されている）、他にも、彼が北京に到着した際に詠んだ一首がある^[6]。

京邸中秋

秋光此夜十分清 大地河川盡水晶

況復西征新奏凱 歡聲月色滿皇城

秋光此の夜十分清く 大地河川盡く水晶

況んや復た西征して新たに凱を奏し 歡聲月色皇城に満つるをや

「時に皇上、禁旅を親統して葛爾丹に西征し、凱旋して中外に詔を頒つ」との自題があるこの詩は、この年（一六九七年、康熙三六）、清の康熙帝が、自ら出陣した西域ジュンガル、葛爾丹との戦いにおいて勝利を収め、北京に凱旋入場した際の光景を詠じたものである。オイラト族ジュンガル帝国の葛爾丹との戦いにおける康熙帝の親征は、一六九六年から二年間で都合三度（計三二八日間）におよぶが、葛爾丹の病死で清の勝利が決定した最後の遠征完遂時に、ちょうど程順則ら一行が北京入りしたのであった^[7]。いままさに帝国の最盛期を迎えんとする清の都、そして西征軍の凱旋を迎えた夜の皎々たる中秋の月光、明晰で簡明につづられる詩句が、澄み切った臨場

異域に相親しむは惟だ使するの日 重溟も隔て難し
是の詩名
紫巾鶴髮來りて客を迎ふ 衆裏に知る君が心の已に傾くを

中国からの冊封使が琉球で起居した館を「天使館」と称したが、そこに紫金大夫で白髪程順則が挨拶に訪れたことへの礼を述べた詩である。「紫金大夫」は久米村最高の位階。この詩には「字龍文、工詩、前充貢使至京、有『燕臺集』とする原注があり、『燕臺集』は『雪堂燕遊艸』を指すと思われる。もちろん社交的言辭をも含む表現ではあるが、ここからは、程順則が何より詩人として中国知識人にも認知されていたことがわかる。

当時中国福州には、琉球国の出張所「琉球館」（中国名称は「柔遠駅」）があり、北京に派遣される役人、福州で学ぶ「勤學」、北京国子監で学ぶ「官生」、そして中国に漂着した漁民等もそこに滞在、滞留するのがまじりであった。福州から北京への路程は、「北京を直指使節は、福州から船で閩江をさかのぼり、南平で建溪に入って浦城まで行き、ここから陸路で仙霞嶺を越えて浙江省・江山を経て衢州に着き、水路で杭州を目指す。杭州からは運河と陸路で北京へ行く。およそ三ヶ月の旅程」であった^[8]。『雪堂燕遊艸』に収める詩は、この道中での感懐や各地の古跡との出逢いが多くの主題となっている。

さきに紹介した徐葆光の詩中、「舊遊曾て賦す皇居の壮」

感を伝えるものとなっている。

ちなみに、詩には「辺塞詩」というジャンルがある。西域方面に出征した兵士や残された家族を題材とする盛唐詩の一形式だが、日本江戸期の漢詩人たちが好んで、この「辺塞詩」を作ったことが知られている。なかでも「文は秦漢、詩は必ず盛唐」とする明代古文辞派の説を尊んだ江戸期徂徠学派の服部南郭（一六八三—一七五九）の「辺塞詩」は有名である。彼らが「西域を思うよすがをまったく欠いた江戸の風土において辺塞詩を詠むことの意味」（齋藤希史）を問うことは、江戸社会に閉じ込められた文人たちの自己意識と、「擬古」に込められた真意をさぐる重要な契機となり得る^[9]。それら江戸期詩人たちが思いを込めて詠じた人工の「辺塞詩」に比べれば、程順則の、西域から凱旋帰国する兵士を詠じたこの詩は、淡々とした平明な叙事詩に一見みえる。しかし逆に、字句に含意を過剰に込めない叙事詩であるがゆえに、情景が鮮明に伝わってくる詩となっているといえるであろう。その後、程順則は北京からの帰途、蘇州に至り「姑蘇省墓」と題する詩を二首詠んでいる^[10]。それは、題辭に「先君、諱は泰祚、號は景陽。中山の世臣と為り王事に勤勞し精白一心。癸丑十月貢を守り京に進む。甲寅（一六七四年）五月、回りに江南に至りしとき、閩の變を聞く。道梗りて姑蘇に留滞す。家國に憂心すること奄奄たり。病篤く乙卯を越えて捐館（館を捨てての意で、死亡すること）し、吳縣に葬る……」と記されているように、

本稿最初に触れた、彼の父、程泰祚が客死した地を訪れ墓碑に詣でて、作詩されたものであった。彼は最初の渡唐時、北京への途次一度この父の墓を訪れていたのだが、二回目渡唐の際は、福州「存留通事」に任ぜられていたため機会がなく、今回の渡唐に際し再び墓参することを得たのである。

姑蘇省墓二首「其一」

勞勞王事飽艱辛 贏得荒碑記故臣
萬里海天生死隔 一時父子夢魂親
山花遙映啼鵲血 野蔓猶牽過馬身
依戀孤墳頻慟哭 路傍樵客亦沾巾

王事に勞勞して艱辛に飽き 贏し得たり荒碑に故臣を記すを

萬里の海天生死を隔て 一時父子の夢魂親しむ
山花遙かに映ず啼鵲の血 野蔓は猶ほ牽く過馬の身
孤墳に依戀して頻りに慟哭すれば 路傍の樵客も亦た巾を沾す

「其二」

忍看霜露下蘇州 十四年中淚復流
鹿走山前松徑亂 烏啼碣上墓門秋
淒涼異地封孤骨 慙愧微官拜故丘
過此不知何日到 茫茫滄海望無由

「旅」や詩を考えるとときも、そうした苛酷な背景を思いつつ理解していくべきであろう¹¹⁾。

程順則は後に、自らの『雪堂燕遊艸』をはじめ、琉球国王尚貞や学問の師、陳元輔や冊封副使徐葆光の詩文を収載した詩文集『中山詩文集』（中山）とは琉球のことを、福州在住文人の助力を得て彼の地で上梓している（一七二五年）。またこの詩文集に先立って清で編された『皇清詩選』には、琉球人の詩が多く載せられており（二十五人、計七十首）、その背景には程順則の尽力とその中国人脈があったであろうとされる。さらに師、陳元輔の詩集『枕山樓詩集』を自ら出資して出版（一六九一年、康熙三〇）したのも程順則であり、この詩集は江戸にも到った¹²⁾。

陳元輔の詩集に収められる「送程龍文歸中山十首」と題する送別歌「其九」には、以下のように記す¹³⁾。

枕山詩草委沙泥 獨檢焚餘授棗梨
喜有蛩吟傳異日 愁將驪唱補新題
王通事業存房杜 晉室風流寄阮嵇
歸去東溟詞賦重 雪堂今好繼瀛西

枕山詩草沙泥に委す 獨り焚餘を檢め棗梨に授く
喜ぶ蛩吟の異日に傳はる有るを 愁ふ將に驪唱して新題を補ふを
王通の事業は房杜に存し 晉室の風流は阮嵇に寄す

忍んで看る霜露の蘇州に下るを 十四年中涙復た流る
鹿は山前に走りて松徑亂れ 烏は碣上に啼く墓門の秋
淒涼たる異地に孤骨を封じ 慙愧たり微官故丘を拜す
此を過ぐれば何れの日にか到るを知らず 茫茫たる滄海望むに由無し

第一首「贏得」とは、結局のところ墓碑のみを勝ち得たことをいう。また、「過馬の身」という表現には、自らもまた王命に従って旅していることが込められているのであるうか。公務に身を勞し、竟には異地に斃れた父への哀切の思いにあふれる二首であるが、程順則一家は父の難死にとどまらず、数多くの艱難にみまわれてきた。久米村「閩人三十六姓」（久米村の人々自身は自らのことを「唐榮」と称した）は代々、王国の対中交流の専門家として活動してきたが、程氏一族も例外ではない。父泰祚も子順則も、その弟も、子もまた外交官として中国へ渡った。そして父同様、弟順性も、そして順則の四男允升も共に公務中、彼の地で旅客として果てたのである。弟順性は、一七〇二年、公務を終えて閩港外五虎門を出た後嵐に遭って遭難死し、四男允升は北京からの帰途、山東で一七二九年に没している（享年三十六）。程順則の

東溟に歸去して詞賦を重ね 雪堂今に好く瀛西を繼がん

「放り出していた小生の詩を貴兄が本としてくださる、コオロギの鳴き声の如き拙い私の詩が後世に残ることはうれしいが、いま貴兄を送る詩をうたうことが悲しい、王通の事業は房玄齡、杜如晦に存し、晋の風流は阮籍、嵇康に依っている、貴兄（雪堂は順則の号）は東海を故国に帰られて詞賦に励まれ杜甫（瀛西は杜甫の故地）を継ぐ詩人となるであろう」

元輔は進士を目指しつつ「布衣」のまま終わった、中国でも広く知られた学者ではなかったが、程順則だけではなく、福州琉球館（柔遠駅）に滞在した琉球人の多くと交流し、学問を教授した人物であった。「勤學」に來た琉球人を彼が案内して、福州市内烏石山にある磨崖石刻群を訪ね、朱熹自筆「石室清隱」の石刻を見学したことをうたった詩が残されている。中国滞在中に朱熹の真跡（「香飛翰院圖川野春報橋壘翠新」の十四字）を手に入れ琉球に持ち帰ったこと（『家譜』）を記す程順則もまた、師陳元輔とともに朱熹の石刻を訪ねることがあったであろうか。

こうした活動が示すように、程順則は自身優れた詩人であったのみならず、詩文を介して清―琉球―江戸をつないだ、自覺的な文化伝達者でもあったのである。

三 『廟学紀略』を曲阜孔子廟に奉じる

一七〇六年（尚貞三八、康熙四五）、程順則四回目の渡唐は、「進貢正義大夫」^{（註）}として耳目官馬元勳宮平親雲上良康とともに行つたもので、出発前に王世子、世子妃聞得大君加那志、王世孫からはなむけを賜り、大御殿での宴を賜つての出発であつた。

福州から北京への路程は前述のとおりであるが、今回はまた別の目的もあつた。それは孔子の故地、山東省曲阜への訪問である。彼は、中国到着後福州で半年を過ごした後、翌年九月二六日、北京への途次、山東濟寧州に寄り道した。「曲阜縣の孔子本宅闕里廟に謁し、遂て孔林聖墓廟林に拜す。香燭酒帛を俱に用ひ、贊唱して三跪九拜叩頭の禮を行ひ、訖はりて琉球廟學紀略を衍聖公（宋代、孔子の子孫が賜つた世襲の爵號）に呈す」と、『家譜』は記している。

この、文中にある「琉球廟学紀略」とは、那覇を出発の年に自ら書き上げたばかりの『廟学紀略』^{（註）}のことである。順則四十四歳の時に書かれたこの琉球儒学史は、琉球における中国由来の儒学受容史として、いまでも第一級の（そして唯一の）基礎史料となるものである（「中国由来の」としたのは、実は近世琉球儒学の源流には、明清から輸入された儒学と、薩摩の軍事侵攻「薩摩入り」（一六〇九年）以降、薩南学派經由の朱子学との二源流が存するからである）。この著述があることによつて、私たちは初めて琉球儒学の沿革を知ることができる。

またここに記される、自らもその任に当たつた「講解師」「訓詁師」による儒学教授の姿は、科挙（科試）を採用した琉球における伝統的教育として継続されたものであり、そのことは諸書に言及されている。清からの冊封副使、徐葆光（一七一九年来琉）の記録『中山傳信録』もまた、「講解師」と「訓詁師」の存在に着目し、久米村聖堂の様子を以下のように記録している^{（註）}。

聖廟在久米村泉崎橋北、門南向。進大門、庭方廣十餘畝、上設拜臺。正堂三間、夫子像前又設木主、四配各手一經。正中梁上、亦摹御書萬世師表四大字榜書。……明倫堂左右兩廡、蓄經書籍文略備。國王又命紫金大府程順則刊刻聖諭十六條演義教節、月吉講之。舊例、以紫金大夫一員司教、每旬三六九日詣講堂、稽察諸生勤惰、兼理中國往來貢典、並參贊大禮。

聖廟は久米村泉崎橋の北にあり、門は南に向いている。大門を入ると堂前の広場は広さ十余畝、上座には拝台がもうけられている。正堂は三間、光子像の前には木主が置かれ、四配はそれぞれ一經を手に行っている。真ん中の梁の上には御書「萬世師表」の四大字が模されている。……、明倫堂の左右の廊下には経書、書籍がほぼ備わっている。国王は紫金大夫程順則に命じて「聖諭十六条演義」教節を刊刻させ、毎月朔日に講じさせる。旧例で、紫金大夫ひとり司教とし、毎旬三、

ともあれ、まずはその概要を記しておこう。

冒頭「琉球國は海外に僻處し、風俗は質朴、明初に中朝に通じてより、王爵を膺く」と、明への朝貢の開始から始まるその記述は、明の洪武二五年の「閩人三十六姓」来流、移住を契機に儒学が琉球に伝わり、さらに明の万暦年間に、紫金大夫蔡堅（一五八五〜一六四七）が中国から聖像（絵画）をもたらし私邸に奉じていたが、後に尚貞王の許可を得て、久米村に孔子廟が創建されたこと、明の学者の渡琉を得て儒学が広まったこと、それ以前には学問が無かつたことをいう。

按ずるに興学の始例、中國の大儒を延きて生徒に教授す。明の毛擎台諱鼎、曾得魯、張五官、楊明州の四先生の如きは、今に至りて國人能く之を道ふ。夫れ木に根本有り、學に淵源有り。四先生の教澤、我が國に及びて、炳として日星の若し。今に及びて紀せざれば、後將に之を傳ふる者無からんとす。四先生以前に至りては、則ち考ふべからず。

そして程順則は続けて、久米村で文理に精通した者一人を択んで「講解師」とし、句読鮮明なる者一人を択んで「訓詁師」として、儒学教育が始まったことを述べる。そして、その後の琉球儒学の学統が尚敬王の代まで記されている。前にも述べたように、明倫堂建立も順則の献策によるものであつた。

六、九の日に講堂に詣で、諸生の勉学状況をしらべ、あわせて中国との貢典の往来を処理し、並びに大札に参加し補助する。

ここからは、当時の聖廟の様子とそこで行われたことがらの一端をうかがい知ることができる。そして特に注目したいのは、国王が程順則に命じて「聖諭十六条」を刊刻させ、講義させたという点である。これは琉球儒学の特質の一つに関わることであり、この明清由来の教諭思想の琉球における普及に、程順則は深く関わっていたのである。

そもそも彼が中国で『六論衍義』に触れたのは、その一回目の渡唐（一六八三年）の際、福州での学問の師、竺天植の机上にそれを目にしたときのことであつた。その教育的効果を理解し、またその口語記述が中国語学習に役立つと信じた順則は、一七〇八年、四回目の渡唐のおり、福州で自費板行し、琉球に持ち帰つたのであつた（程順則版『六論衍義』自跋、および竺天植「序文」）。順則はこのとき、航海のための海図等の案内書『指南廣義』も出版している。

『六論衍義』とは、順治九年（一六五二）、清の世祖順治帝が頒布した六箇条の教諭、「六論」（第一孝順父母、第二尊敬長上、第三和睦鄉里、第四教訓子孫、第五各安生理、第六毋作非為）に、康熙年間、范鋌が白話による解釈を加えて民間に広まったものである（「六論」本文そのものは、明の太祖洪武帝の「教民榜文」（一三九八年）に由来する）。この『六論衍義』が、琉球を経由して程順則

から薩摩藩主島津吉貴に献呈され、それがさらに一七一九年（享保四）將軍吉宗のもとに届き、その後、吉宗の指示により寺子屋に頒布され、江戸社会に広範に流通することとなるのである。

そのきっかけとなったのが、程順則が重要な役目を負って加わった一七一四年（尚敬王二、正徳四）の「江戸立ち（江戸上り）」であった。

四 「江戸立ち」と文人との交流

琉球王国は、明朝以降、中国に通じ、中国王朝の交替期に一度断絶したものの、清への朝貢が再開されると、定期（一六三三年からは、二年一貢）に北京への朝貢、および「官生」（公費留学生）の国子監派遣がなされ、それに対して清朝からの冊封使が計二十二回を数えた。つぼう、薩摩島津氏が徳川幕府成立後の一六〇九年、艦船を連ねて琉球に侵攻し、実質支配下におくにいたっていた。琉球には薩摩藩の在番奉行所が常設され、検地が実施された（検地結果は、十二万三千七百石）。以降、琉球は王国として自立しつつ（近世期琉球人口はほぼ十数万（二十万人）、中国との往來のいっぼう、薩摩藩の支配の下、薩摩を介して明治維新までに計十八回の「江戸立ち（江戸上り）」（慶賀使と謝恩使。琉球では「江戸立ち」と呼ぶ）が華麗に実施されるという、領土、人口ともに小さいながら、東アジアの国際政治のせめぎあいの最前線に在った。

第五代將軍徳川綱吉のあとをうけて、一七一〇年（宝永六）綱豊が第六代將軍（家宣に改名）に就任すると、側用人間部詮房とともに最側近として家宣に仕え、「正徳の治」の立役者ともなった大学者である。そして、新井白石は外交にも大きな影響力をふるい、対朝鮮外交で活躍した（朝鮮通信使への対応の変更）のみならず、琉球使節に関しても大きく関与した。その白石と順則との出会いがあったのである。

白石が後に書いた自伝『折たく柴の記』には、今回の琉球使節来訪に関して、以下のような記述が残されている¹⁷⁾。

十一月には、琉球の使節来て、御代をつがれし事も賀しまいらせ、其王の代をつぎし事も謝し奉る。

これよりさき琉球より奉れる書法は、我國にて往來する所のごとくなりしを、其王尚益が代より其書漢語を用ひ、書函の等式も改れり。されど異朝にしては當代の御事のごとくなる事のなければ、稱しまいらする所にも、字を用ふる所にも、しかるべしとも見えぬ事共あり、殊には外國にして、我國の文字を用ひ來りぬるはひとり琉球のみなり。ありし御代のごとくならむ事は、國體におもてもしかるべしと申したりければ、詮房朝臣さらば其事いかにや仰下さるべきと問はれしに、とりはからふべきやう侍りて、琉球の書に、大君尊大人、または台聽等の字を

程順則が、国王の文書に与る「掌翰史」の役目を得（旅中、名を「宮里親雲上」に改めた）、慶賀正使尚監與那城王子朝直、謝恩使尚永泰金武王子朝祐に随つて、江戸に旅立ったのは一七一四年、八度目の「江戸立ち」においてである。五月二六日那覇を「開船」し、六月八日鹿児島城下に到着、薩摩藩主島津吉貴の朝見を経て、九月九日参勤交代で上京する島津氏一行に付き添われて、大坂、伏見、中山道を経て、一月二六日、芝の薩摩藩屋敷に到着している。二月二日には江戸城に登城して（登城は計三度に及んだ）、無事公務を果たし、さらに上野の東照大権現宮参拝もすませて二月二日に江戸を發ち、往路を戻るかたちで、翌年二月二日に鹿児島城下に帰着。薩摩公に依頼された新たな用もすませて三月一日に山川を出船、那覇に帰着したのは三月二四日のことであった。

この「旅」でも順則は多くの公務を果たしているが、文人程順則としても、貴頭の多くの要望に応えている。帰国を遅らせて、薩摩で藩主吉貴の要望に応じて、木村探元の画に書画賛を作ったのもそうである。そしてこの「旅」における、文化史上重要な出来事は、江戸での新井白石（一六五七〜一七二五）との面談と、京都伏見における近衛家熙（一六六七〜一七三六）との文人としての交流であった。

木下順庵門下の朱子学者新井白石は、推されて甲府領主徳川綱豊の侍講となり、「生類憐れみの令」で知られる

用ひん事、しかるべからず、其國の心のごとくにして、彼使者に申さるべしとするして、たゞなにとなく、薩摩守に仰られ候べしと申す。……

ここに白石が指摘する「其王尚益が代より其書漢語を用ひ、書函の等式も改れり」というのは、この回に先立つ一七一〇年（尚益一、宝永七）の「江戸立ち」において、薩摩の意向の下、それまでの和語ではなく漢語を用い、將軍を「大君」と呼んだことに関わっている。そこには、薩摩島津氏の、あえて琉球使節を中国風に（外観も）装わせることで、「異國を従える薩摩」の威勢を誇示しようとする意図があったのであるが、白石はそれを原則主義に基づき元に戻させたのである。ここには、朝鮮通信使への対応の場合と同様、「名」を「國體」に合致させようとする、朱子学者としての「正名」論があった。

ところで『折たく柴の記』には、この文章の最後に以下のような記述がある。

我も問ふべき事どもあれば、其由を申して、十二月の十八日に、薩摩守の許にゆきむかふ。吉貴朝臣も、對面におよぶ。彼國のものどもにもあひたり。此時には縁塗に水干袴、太刀をば用ひず、腰刀に紅梅の扇をとりぬ（此扇は近衛前攝政大相國の給りし所に、泥地に蝶鳥をかく）。

そのすぐ前までの理屈っぽい書きぶりとは一氣に異なり、急に柔らかな風情をかもしだす記述ではある。実は、このとき新井白石は薩摩藩江戸屋敷までわざわざ出向き、島津吉貴同席の下、琉球使節の面々と個人的な対面を果たしたのであった。白石が琉球について詳細に記した『南島志』（享保四年成）は、このときの面談が素材となつてできあがったものなのである。

この薩摩藩江戸屋敷での白石と琉球使節との対面に關して、『白石先生琉人問対』と題された写本が存している。それを発見し調査翻刻した宮崎道生は、白石が『南島志』中に使節上京時に面会した者として列挙した、慶賀使與那城王子、謝恩使金武王子以下七名のうち、「白石の質問に答へたのは、宮里親方、白石のいはゆる「文章之士」程順則と、玉城朝薫・砂辺親方の三人の誰かであつたらう」とし、その「注」では、白石の質問に答えた者を程順則と比定する東恩納寛惇の説を引いている¹⁸⁾。

実際、このときの参加者の学問、識見や年齢を考えると、主たる對話者を程順則とするのは妥当だろう。たとえば『白石先生琉人問対』中、福州琉球館について「…惣して琉球館又は会同館などの家造り、広狭いかやうに候敷」といった、白石の微に入り細を穿つ具体的な質問に対し、「琉球館本庁、長十二間、横八九間、左右長房、各長二十一間、横五六間、又有一房、長八九間、横五六間、有天妃宮、長八九間、横五六間、…」といった返答は、何度もそこに滞在した経験を持つ程順則に

國の給りし所にて、泥地に蝶鳥をかく」と自注を付け加えたのも、前回の京都行き（近衛家熙との出会い？）、その折りの宝永七年琉球使節との面会の記憶があつたのかも知れない。というのはこの後、琉球使節一行が復路、草津、伏見にいたつたとき、程順則と近衛家熙との重要な出合いが待つていたからである。

近衛家熙とは「五撰家」の筆頭近衛家の第二十一代当主、関白、太政大臣、摂政を歴任した人物であり、有職故実に通じ、茶や書でもしられた風流人であった。將軍家宣とも、薩摩藩主島津吉貴とも姻戚でつながる、ときの権力中枢にきわめて近い有力公家であった。その近衛家熙が、江戸から帰途、草津に到着した琉球使節の一行に使者を遣わし、程順則、玉城朝薫らに詩文等の作成を依頼したのである。近衛家熙が程順則に依頼したのは、自ら有する鴨川沿いの別邸「物外樓」を詩に詠んで欲しいという願ひであった。その願ひに応じて程順則は、「物外樓記」をさつそく草津の宿でしたためて贈り、また「寄物外樓隱君子 四首」も作詩したのであった。

そして両者の応答はこれにとどまらなかつた。順則の書、詩に対する礼として近衛家熙から拝領物が送られ、その返礼として、琉球に帰つた程順則から「康熙帝御詩宸筆」「孔林楷杯」ほかが薩摩藩を介して献上され（一七一五年）、さらにそれに対して近衛家熙から、琉球の蔡温（一六八二〜一七六一）および他の人に「物外樓」の作詩が再度所望され、それに応じて蔡温、蔡文溥（一六七

して返答可能なものだったであろう。それにしても、この写本（そして『南島志』）に見られる白石の飽くことなき探求心には驚かされる。白石は事前に丹念な準備をした上で、琉球に来訪する冊封使の実情や清の現況について、きわめて事細かな質問を重ねているのである。

実は白石は、この面談に先立つ一七一〇年（宝永七）の琉球使節にも面談を果たしていた。『折たく柴の記』には「辛卯年正月元日、天皇御元服の儀を觀たり。此日まぢかく龍顔を拜しけるこそありがたき事なれ。そののち、琉球の使聘、事終りて歸るとて伏見に來りどまると聞て、同八日に、かしこにある薩摩守の第にゆきむかひて、美里豊見城兩王子等に相逢ふ事を得たり。これかねてより仰下されし事ありしが故也き」とあり¹⁹⁾、白石は東山天皇御即位にあわせて京都を訪れたとき、ちようど江戸からの帰途だった宝永七年の琉球使節にも面会していたのである。そしてこのとき、白石は自らの詩集『白石餘稿』を友人高玄岱（深見玄岱）を介して琉球使節に託し、それが「琉球引礼通官」鄭恪齋を通して北京の翰林院學士鄭任鑰（鄭恪齋の甥）のもとに至り、その批評ならびに「序」を得て、再度、今回一七一四年の琉球使節來訪時に、白石の手元に届いたという経緯もあつたのである。

そうした背景を考えると、今回、白石が琉球使節との面談に臨み「縁塗に水干袴、太刀をば用ひず、腰刀に紅梅の扇をとりぬ」といったいでたちで出かけたことが自然と納得される。そしてさらに「此扇は近衛前攝政大相

一（一七四五）ら琉球の名だたる学者が作詩して贈呈し（一七二一年、享保六）…等と、文事の交流が延々と続いたからである²⁰⁾。もちろんこれらは、順則らにとつて単なる風流事ではなく、王国としてないがしろにできない薩摩藩が介在した重要な責務でもあつた。

ところでこの、順則が近衛家熙に贈つた「孔林楷杯」とは、実は彼が「江戸立ち」に先立つ四度目の渡唐のおり、先述した山東曲阜の孔子廟に詣でた際、孔子一族の墓地（孔林）にあつた楷の木根の塊をひとつ持ち帰つてきていたものを、内側を金色に塗つて「杯」にしたたものであつた。ただこれを贈られた近衛家熙は飲酒を嗜まなかつたため、それを裏返しにして「木假山」として愛玩したことが伝わっている。家熙はこの、「杯」転じて「木假山」となつた経緯に興を起こしたのか、ことの由来も記した「木假山記」の執筆を程順則に依頼し、琉球王府は蔡温にそれを書かせ、京都に送つたという経緯が伝わっている。この際も仲立ち、周旋したのは薩摩藩であつた。

程順則の「江戸行き」はかくして多忙な「旅」であつた。彼は王国を代表する外交官として、詩人として、なすべきことをなし、日本にもその名を馳せたのである。

五 晩年の程順則

程順則は江戸から帰つてからも多忙であつた。帰国の際には琉球の天妃宮（媽祖廟）に自ら資金を出して二神

将像（千里眼と順風耳）を建立、翌一七一六年には「琉球國創建閔帝廟記」等著し、一七一八年には儒学の学校「明倫堂」創建を建議し完成させている。そしてその翌年（一七一九年）には春秋の積奠を礼に則って行い、同年にはまた「冠舟諸事考並びに御用意方」として、総人数六四人からなる冊封使一行の接待役となり、一七二〇年春、その任を終えるやいなや、二月には五回目の「唐旅」に従事して北京に赴く、といった具合であった。

ところで、程順則とはどのような人物だったのか。まずなにより彼は、「名護聖人」と敬称されたごとく、民の教化に努めた人格者として世に知られた。後に、琉球王国末期の「脱清人」のひとり、蔡大鼎（一八二三〜？）が彼の「伝」を記し「康熙年間、本郷に程公寵文なる者あり。資質既に高く、學力又到る。徳は人表に足り、恩は人心を結ぶに足る。君子の望にして聖人の徒と為る者と謂ふべし」^[2]と顕彰したのも、そうした評価につながる程順則像である。

彼が最後の役職「名護間切總地頭職」^[3]についたのは一七二八年（尚敬一六）、その翌年、順則六十七歳のときには、前にも触れたように、四男允升が山東省で公務中に客死するという出来事があった。彼は早くに妻を亡くし、実弟を中国から帰途の海上遭難で亡くし、その同じ年に、三男、長男、次男が相次いで夭逝し、この年ついに四男も公務中の中国で亡くしたのである。そして、年老いて孤独の人となった彼が没したのは一七三四年、享年七十

二であった。

程順則がただ一人残った四男を亡くした際、彼の嘆きを慰謝する、二十歳年下の友人蔡温からの手紙（の草稿？）が残されている。順則から蔡温のもとに届いた手紙に「哀悼尤怒の意」が見えることを惜しんだ蔡温は、「窃かに想ふに、壬午の歳三月、足下の第三子搏雲、病に染みて竟に亡じ、長子搏九、幾月を隔てて逝き、第二子搏万、又机（幾）^[4]ばくを歴て斃す。唯第四搏霄、長じて康健なりしに、詎ぞ想はん、己酉の歳出使して京に赴きし時、又半途に在りて病故せんとは、四子俱に不幸にして短命、足下に先んじて亡す。是の歳、貢船の帰るに因りて既に訃音を聞き、深く之が為に嗟嘆す。是れ誠に人家の最凶なるものにして人情の当に深く悼むものなり。然れども吉凶禍福は之を致すこと莫くして至るものは命なり。君子は必ず命を天に俟ち苟も疑はず。豈に尤怒の理有らんや」云々と、順則の気持ちを慰謝することにつとめている^[5]。

琉球を代表する儒者として並び評される程順則と蔡温については、対照的な琉歌が伝わっている。程順則の「ほめられもすかぬ、そしられも好かぬ、浮世なだやすく渡りぼしやの」という歌に対し、「ほまれそしられや、世の中の習ひ、沙汰もないぬ者の、何役立ちゆが」という蔡温の歌がそれである。「毀誉褒貶は世の習い、世に取り沙汰されることのない程度の者は役にも立たない」とする蔡温と、「褒められることも好まぬ、誹られることも好

まぬ、平穩に生きたいものだ」という程順則の歌である。

二人に対する世の評価がそのまま反映したような、いささかできすぎの感もある歌であるが、彼の辛苦に満ちた「旅」の生涯、恵まれなかった家庭生活に思いを馳せれば、程順則の生涯がけっして「浮世なだやすく、渡りぼしやの」を実現したものでなかったことは明らかだろう。彼は蔡温のように、儒学に関する深い洞察を残したわけではなく、政治家として王国経営の中心に居たわけでもない。彼が生きた世界は、外交の篤実な履行と儒教道徳の普及にあり、詩文を介した文人間の交際にあり、海域を越えた文化の伝達にあった。

程順則は、清と日本のはざまに生きる琉球知識人の矜持を、その生涯をかけて示した人であった。

注

[1] 程順則の生涯を概観したものととして、眞境名安典『教育界の偉人・程順則』（伊波普猷・眞境名安典『琉球之五偉人』小澤書店、一九一六年、所収）、眞栄田義見『名護親方程順則評傳』沖縄印刷団地出版部、一九八二年、名護市史編さん室編『名護親方程順則資料集・1 人物・伝記編』名護市教育委員会、一九九一年、ほかがある。

[2] 本稿中、程順則『家譜』からの引用は、『程氏家譜』（那覇市企画部市史編集室編『那覇市史』「資料編」、第1巻6、家譜資料二（下））「那覇市、一九八〇年、所収、原漢文）による。書き下しは筆者。

[3] 沖縄県立図書館史料編集室編『歴代宝案 訳注本第一冊』沖縄県教育委員会、一九九四年、三五二〜三五三頁。
[4] 『雪堂燕遊艸』からの引用は、上里賢一編『校訂本 中山詩文集』九州大学出版会、一九九八年、による。書き下しは筆者。
[5] 鄧揚華『徐葆光 奉使琉球詩 舶中集』詳解』出版舎⁵⁾ 2010年、六三頁。書き下しは筆者。

[6] 上里賢一『久米村と漢詩』（上）久米村崇聖会、二〇一八年、九頁。なお、程順則の詩の解釈に関しては、上里賢一『久米村と漢詩』（上）（下）および、島尻勝太郎選、上里賢一注釈『琉球漢詩選』「おきなわ文庫」49、ひるぎ社、一九九〇年、ほか上里氏の諸研究から多くの教示を得た。

[7] 前掲『校訂本 中山詩文集』二六一頁。
[8] 岡田英弘『清朝史叢書』大清帝国隆盛期の実像―第四代康熙帝の手紙から 1661―1722』藤原書店、二〇一六年、参照。上里賢一はこの詩が描き出した光景を、『清史稿』中の記述や岡田英弘『康熙帝の手紙』（中公新書）一九七九年）中の議論と、詩題の「中秋」と詩の中身とをあわせ考えて「岡田氏の説くように」ガルダン征伐からの皇帝の帰還を七月とし、それから八月二四日に程順則一行が北京に入場した頃、皇帝一行に遅れて帰還した師団があり、それを迎える様子を見た方が自然なようだ」としている（前掲『琉球漢詩選』四九頁）。

[9] 齋藤希史『漢文スタイル』羽鳥書店、二〇一〇年、一七五頁。服部南郭の「辺塞詩」に関しては、日野龍夫『徂徠学派

一儒学から文学へ』筑摩書房、一九七五年、が先駆的に論じ、揖斐高『江戸詩歌論』汲古書院、一九九八年、にも論じられている。

〔10〕前掲『校訂本 中山詩文集』、一七二―一七三頁。

〔11〕上里賢一「程順則の父と子―程順則の情愛と苦惱―」『日本東洋文化論集・琉球大学法文学部紀要』第12号、二〇〇六年、も参照されたい。

〔12〕陳元輔と程順則ほか福州に滞在した琉球人との交流に関しては、上里賢一「陳元輔の漢詩と琉球―『枕山樓詩集』を中心に―」『歴代宝案研究』第10号、一九九九年、季龍飛「清代福州柔遠駅における文人交流―康熙年間、陳元輔を起点として―」『琉球大学学位論文』二〇二〇年（琉球大学学術リポジトリ）、を参照。

〔13〕前掲、上里賢一『久米村と漢詩』（七）、一一九―一二一頁から引用。書き下しは、上里氏のもの参照しつつ筆者による。

〔14〕「正義大夫」は久米村人に与えられた官位。中国への進貢の際、進貢正義大夫（進貢副使）となる役職。進貢正義大夫の職をへて紫冠を戴く。紫冠の正義大夫となり、再度謝恩使、慶賀使の副使を拜命した者、あるいはこれと同等の功績有る者が、久米村最高位である「紫金大夫」に任命される（『沖繩大百科事典』（中巻）沖繩タイムス社、一九八三年、五四―五五頁、二八八頁）。

〔15〕前掲『程氏家譜』所収の原文による。以下、『廟学紀略（畧）』全文と試みの書き下しを付す。

春司教時、令周國俊講解經学、續奉王諭止於久米村内。無論大夫、都通事及通事等、中擇文理精通者一人為講師。始於鄭弘良、繼則曾夔（原名益、避王世孫諱改名）、鄭明良、蔡應瑞、蔡肇功、程順則、梁津、王可章、鄭士綸、節次為之。又擇句讀鮮明者一人為訓詁師。始於鄭永安、繼則鄭明良、王可法、蔡應祥、蔡灼、鄭士綸、林謙、梁承宗節次為之。於康熙二十二年荷冊封天使汪公、林公奏允該國官生入國學以沾同文之化。王乃以梁成楫、阮維新、蔡文溥應詔及奉旨歸國後、即令為講解訓詁之師、三人更番為之。厥後又有程順性、周新命為講師、蔡文漢、蔡温、陳其湘、蔡績、梁天驥、為訓詁師繼此。而主師席者、歲月云遙、姓名不一、是所望於後之君子秉筆續紀、則中山一氈可綿綿弗替矣。順則夙稟魯鈍、淺見寡聞、讀書窮理、有志未逮。第思聖所以垂訓萬世者也、師所以傳道解惑者也。今喜王尊聖隆師、諸大夫崇儒重道以仰副聖天子教化無外至意。故將建廟興學顛末並記於此。昔康熙四十年五年歲次丙戌仲冬望後三日、中山王府進貢正義大夫後學程順則謹識。

※「書き下し」

琉球國は海外に僻處し、風俗は質朴なり。明初、中朝に通じてより、王爵を膺く。時に王子、洎び陪臣の子弟、始めて大學に入る。洪武二十五年に至り、復た閩人三十六姓を遣はして往きて鐸せしむ。東魯の教澤漸く濡ふと雖も、尼山の儀容未だ覩ず。萬曆間に及びて、紫金大夫蔡堅、始めて聖像を繪かせ家に祀る。之を望めば儼然として、人をして仰止の思ひを興さしむ。嗣いで紫金大夫、金正春、家に祀るの襲に

※程順則『廟學紀畧』「原文」

琉球國僻處海外、風俗質朴。自明初通中朝、膺王爵。時王子洎陪臣子弟、始入大學。至洪武二十五年、復遣閩人三十六姓往鐸焉。雖東魯之教澤漸濡、而尼山之儀容未覩。及萬曆間、紫金大夫蔡堅始繪聖像祀於家。望之儼然、令人興仰止之思。嗣而紫金大夫金正春、恐家祀近襲非尊聖重道意、於康熙十一年請立廟。王充其議、迺卜地久米村、至康熙十三年、令匠氏庀材、不日成之。越明年塑像於廟、又明年行春秋釋菜禮。既新輪奐復肅俎豆、恍如登闕里之堂、躬逢其盛也。創始之功洵不祧矣。續於康熙二十二年、蒙冊封正使翰林院檢討汪公、副使內閣中書舍人林公、齎到御書中山世士四大字賜王。復奏允陪臣子弟入國子監讀書均異數也。然皆立廟以後事、可知崇聖教。即邀帝眷、其理微矣。從此睿藻輝煌、如睹龍文鳳彩。監生歸國與人言孝言忠。孰非聖澤之所及者遠且大耶。順則仰瞻曠典、感激懼忭。載筆特書、以誌一時之盛云。按興學之始例、延中國大儒教授生徒。如毛筆擎台諱鼎、曾得魯、張五官、楊明州四先生、至今國人能道之。夫木有根本、學有淵源。四先生教澤及我國炳若日星。及今弗紀後將無傳之者。至於四先生以前、則不可考矣。順則不敢以疑似漫筆、亦信則傳之、疑則闕之之意也。或從成均歸命、主師席者、亦間有之。又按舊例、以紫金大夫一員司教、每旬三六九日、詣講堂稽察諸生勤惰、兼理中國往來貢典并參贊大禮。歷年久遠者無從記其姓氏。今所可考者、明萬曆間、鄭迴以官生入監、返國後授長史、旋擢斯職。其後則有蔡堅、金正春、鄭思善、周國俊（國俊以正義大夫、授紫金大夫職）、王明佐、蔡國器、蔡鐸為之。又按金正

近づき聖を尊び道を重んじること恐れ、康熙十一年、廟を立てんことを請ふ。王、其の議を充し、迺ち地を久米村に卜し、康熙十三年に至り、匠氏に令して材を庀へ、日ならずして之を成す。越えて明年、廟に像を塑し、又明年、春秋釋菜の禮を行ふ。既に輪奐を新たにし復た俎豆を肅へ、恍として闕里の堂に登るが如く、躬ら其の盛に逢ふなり。創始の功、洵に不祧たり。續いて康熙二十二年、冊封使翰林院檢討汪公、副使内閣中書舍人林公、御書中山世士四大字を齎し到り王に賜ふことを蒙る。復た奏して陪臣子弟の國子監に入り讀書するを允す。均しく異數なり。然して皆、立廟以後の事、聖教を崇ふを知るべし。即ち帝の眷を邀へ、其の理微なり。此れより睿藻輝煌として龍文鳳彩を睹るが如し。監生歸國し、人と孝を言ひ忠を言ふ。孰か聖澤の及ぶ所の者、遠かつ大なるに非ざらんや。順則、曠典を仰ぎ瞻、感激懼忭す。載筆特書し、以て一時の盛を誌して云ふ。按ずるに興學の始例、中國の大儒を延きて生徒に教授す。明の毛筆擎台諱鼎、曾得魯、張五官、楊明州の四先生の如きは、今に至りて國人能く之を道ふ。夫れ木に根本有り、學に淵源有り。四先生の教澤我が國に及びて炳として日星の若し。今に及びて紀せざれば、後、將に之を傳ふる者無からんとす。四先生以前に至りては、則ち考ふべからず。順則敢へて疑似を以て漫筆せず、亦た信ずれば則ち之を傳へ、疑はば則ち之を闕くの意なり。或ひは成均より歸命し、師席をつくる者、亦た間々之有り。又舊例を按ずるに、紫金大夫一員を以て司教とし、每旬三・六・九日、講堂に詣り諸生の

勤惰を稽察せしめ、兼ねて中國往來の貢典を理め、並びに大禮を參贊せしむ。歴年久遠なる者、其の姓氏を從りて記する無し。今考ふべき所の者、明の萬曆間、鄭迥官生を以て入監し、國に返りて後、長史を授けられ、旋た斯職に擢らる。其の後は則ち蔡堅、金正春、鄭思善、周國俊（國俊、正義大夫を以て紫金大夫職を授けらる）、王明佐、蔡國器、蔡驎之を為す有り。又按ずるに金正春、司教の時、周國俊をして經學を講解せしめ、續いて王諭を奉じて久米村内に止む。大夫、都通事及び通事等を論じず、中に文理精通なる者一人を擇んで講解師と為す。鄭弘良に始まり、繼いで則ち曾慶（原名益、王世孫の諱を避け今の名に改む）、鄭明良、蔡應瑞、蔡肇功、程順則、梁津、王可章、鄭士綸、節次に之を為す。又、句讀鮮明なる者一人を擇んで訓詁師と為す。鄭永安に始まり、繼いで則ち鄭明良、王可法、蔡應祥、蔡灼、鄭士綸、林謙、梁承宗、節次に之を為す。康熙二十二年において冊封を荷ひし天使汪公、林公、該國の官生國學に入りて同文の化を沾さんことを允すを奏す。王乃ち梁成楫、阮維新、蔡文溥を以て詔に應じ、旨を奉じて歸國するに及んで後、即ち令して講解訓詁の師と為し、三人番を更へて之を為す。厥の後、又、程順性、周新命、講解師と為り、蔡文漢、蔡温、陳其湘、蔡績、梁天驥、訓詁師と為ること有りて此れを繼ぐ。而して師席を主る者、歲月云遙、姓名一ならず、是れ後の君子に望む所にして、筆を乗り紀を續くれば、則ち中山一たび罷かれ綿綿として替らざるべし。順則夙に稟は魯鈍、淺見寡聞にして、讀書窮理に志有れども未だ逮ばず。第だ聖の萬世に

垂訓する所以の者を思ふなり。師は道を傳へ惑ひを解く所以の者なり。今、王、聖を尊び師を隆んにし、諸大夫、儒を崇び道を重んじ以て聖天子の教化、無外至意に仰ぎ副ふを喜ぶ。故に將に廟を建て學を興すの顛末、並びて此に記す。崑に康熙四十有五年、歲次丙戌仲冬望後三日、中山王府進貢正義大夫後學程順則謹んで識す。

[16] 『中山傳信錄』（那霸市企画部市史編集室編『那霸市史』「資料編、第1巻3、冊封使録關係資料（原文編）」那霸市、一九七七年）、八二頁。

[17] 『折たく柴の記』羽仁五郎校訂、岩波文庫、一九三九年、二二一～二二三頁。

[18] 『宮崎道生』新井白石の洋学と海外知識』「第二部、第四章、琉球研究とその知識」、吉川弘文館、一九七三年、三二八～三六一頁。『白石先生琉人問對』原文復刻も同書。

[19] 前掲『折たく柴の記』、一二六頁。

[20] 沖縄県立博物館「特別展示朝薫踊り順則詩うー琉球王国時代の偉人」展「図録」、二〇一九年、外間みどりほか（調査報告）公益財団法人陽明文庫蔵琉球關係資料について」沖縄県教育委員会『沖縄史料編集紀要』第42号、二〇一九年、ほか参照。

[21] 『程公龍文傳序』『續欽思堂集』（高津孝・陳捷主編『琉球王國漢文文獻集成』第二十九冊、復旦大學出版社、二〇一三年、五三～五四頁）。書き下しは筆者。

[22] 『答程大夫寵文書』『琉球詠詩』（前掲『琉球王國漢文文獻集成』第三十一冊、五四～五五頁）。書き下しは筆者。